

## 環境モニタリングデータ情報発信システムの構築

The development of environmental monitoring data base system

\*関 暁之、鈴木 健太、高橋 義知、松原 武史、首藤 重雄、斎藤 公明、武宮博  
日本原子力研究開発機構

福島第一原発事故に由来する環境モニタリングデータを公開している『放射性物質モニタリングデータの情報公開サイト』にて、事故から現在に至るまでの経時変化を知ることができるコンテンツを新たに追加した。

**キーワード**：放射性物質、空間線量率、分布、時系列変化、データベース

### 1. 緒言

原子力機構は、関係省庁や地方自治体により独自に公開された福島第一原発事故に由来するデータを自動的に収集するツールを開発して、散在したデータを一元的に集約するとともに、表示形式や精度を統一して相互比較を可能としたデータを作成し、『放射性物質モニタリングデータの情報公開サイト』にてWEB公開している（図1）。事故から5年が経過し、多数の環境モニタリングの結果が集約されており、それらを時間的に解析することで、事故後から現在に至るまでどのように放射性物質の分布が変化してきたかを理解するためのコンテンツを新たに追加した。

### 2. 経時変化グラフ表示機能の追加

データベースに登録されている環境モニタリングデータは、約100種類（約4億レコード）となった。これらデータのうち、広域かつ定期的に測定されているデータ（放射性物質の分布状況等調査による空間線量率測定、福島県による環境放射線モニタリング・メッシュ調査、放射性物質の分布状況等調査による走行サーベイ、東京電力による走行サーベイ）

を対象に、指定したメッシュ内の測定値に係る経時変化のグラフを指数回帰モデルのラインとともに表示するようにした。また、同じ画面には拡大縮小可能な地図をおき、地図上のメッシュを選択することで目的とする地域の線量の変化を容易に追うことができるようにした（図2）。

### 3. 結論

これら経時変化のコンテンツを追加できたのも統一した形式でデータを再整備してきた成果である。今後も新たなデータを整備しつつ、事故後の変化を容易に確認できるコンテンツを整備していく。

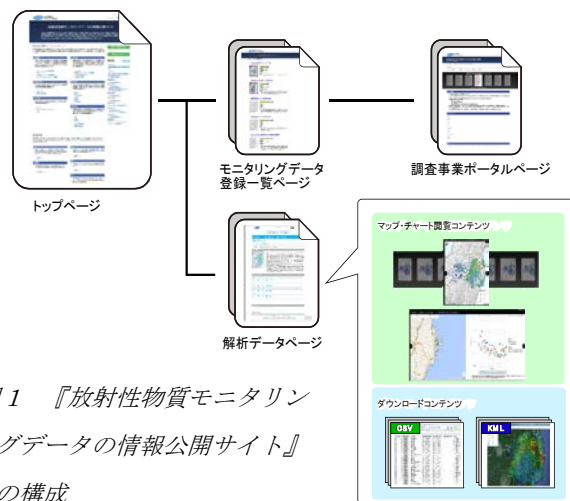


図1 『放射性物質モニタリングデータの情報公開サイト』の構成

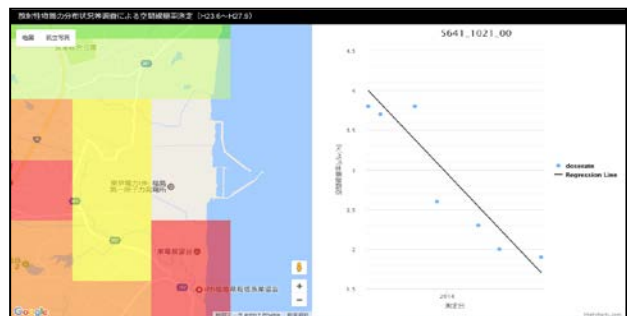


図2 解析データページにおける経時変化グラフ表示機能のイメージ図

\*Akiyuki Seki, Kenta Suzuki, Yoshitomo Takahashi, Takeshi Matsubara, Shigeo Suto, Kimiaki Saito and Hiroshi Takemiya  
Japan Atomic Energy Agency